
大阪は今日も平和です。

梨音

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大阪は今日も平和です。

【NZコード】

NZ8595W

【作者名】

梨音

【あらすじ】

平和にオリキャラ達が絡みます。基本は短編ですが、話自体は繋がっています。偶にオリキャラメインの話も。タイトル通り大阪中心ですが、東京のコナン達も登場します。

オリキャラ紹介（前書き）

登場するオリキャラの紹介です。

オリキャラ紹介

七瀬 香織

中3の秋に改方学園へ転校してきて、それ以来平次や和葉とはクラスが同じに。
彼女独自の情報網が存在し、犯罪組織からクラスメイトに至るまで、様々な情報をを集めている。

高校生になってからは自らを“情報屋”と称し、和葉には内緒で平次に時々情報を提供・事件解決に協力している。

飄々としていて掴み所のない性格。

和葉の恋を友人としては応援しているが基本は傍観で、あくまで中立の立場を貫いている（と本人は思っている）。

小川 孝太郎

平次や和葉とは小学校からの付き合いで、ずっとクラスが同じ。剣道部員で腕はそこそこ。

見た目はそれなりに整っているのだが、平次の存在が強すぎて引き立て役になりがち。

周囲の個性の強い人達や己の性格ゆえか、貧乏くじを引きやすい。大抵の事は苦笑で流すが、本気で怒ると一番怖い。

昔から平次と和葉を近くで見ていて、曖昧なその関係にやきもきしている。

三谷 優子

平次や和葉とは中等部からの付き合いなのだが、高等部ではクラスが離れてしまった。

合気道部員で、和葉とはそれで仲良くなつた。

何事にも積極的にこなすが猪突猛進で暴走する事も。

ただし基本は常識人。

和葉激ラブで、事ある毎に平次と和葉の関係を縮めようと画策している。

ただし詰めが甘く、成功した事はほとんどない。

長谷部 翔

平次や和葉の1コ下で後輩にあたる。

剣道部員で平次に次ぐ実力。

中性的な顔立ちで童顔。

人当たりは良いが毒舌家で、考えが読めない。

平次と和葉を観察するのが大好きで、一人をよくからかつたりする。

西園寺 真莉亜

高2の時、平次や和葉のクラスに転校してきた。

西園寺財閥のお嬢様。

頭は良いはずなのだがどこか抜けている。

普段は猫を被つていてが実は高飛車。

平次に一目惚れし、いつも隣にいる和葉が気に入らない。

事ある毎に平次と和葉の中を邪魔するのだが、いつも失敗している。

オリキャラ紹介（後書き）

中々にクセのあるキャラ達ですが、よろしくお願いします。

朝の風景（前書き）

改方学園の一 日はいつも始まる。

朝の風景

今日も一人の怒声が教室に響き渡る。

「平次のアホ ッ！」

「何やとボケエー！」

改方学園きつての名物夫婦による痴話喧嘩。
はてさて一体、今日は何があつたのやら……。

「……で、今日は何で喧嘩しとるん？」

「それを今説明しようと思つてたんだけど」

「…………誰にーー？」

「まあ、誰でも良いじゃない」

皆さん初めまして。

私は名物夫婦 もとい、遠山和葉＆服部平次の幼馴染コンビ
のクラスメイト、七瀬香織。

私に話し掛けてきたのは一人とは小学校からの付き合いだという、
同じくクラスメイトの小川孝太郎。

顔立ちはそれなりに整ってると思うんだけど、服部の存在ゆえにあまり目立たない 所謂、引き立て役つて言つのかな？まあ、そんな感じの男だ。

……頑張れ、小川君。

「……お前、何や失礼な事考えてへんか？」

「小川君、エスパー？」

「否定せんのかいつ！」

「そんな細かい事、どーでもいいじゃない。それより今はあっちで
しょ」

二人を指差すと「どーでもええつて……」と小川君は文句を言いつ、そちらへと視線を向ける。

どうやら和葉と服部の痴話の付く喧嘩はある程度収まつたようだ。

「あーあ、終わつちやつた」

「……で、結局今日は何が原因やつたん？」

「静華さんに頼まれて、和葉が中々下りてこない服部を呼びに部屋へ入つたら、服部が上半身裸だつたんだと」

「……ホンマ、あいつらも飽きんなあ」

「同感」

「毎朝毎朝、よくもまあ喧嘩のネタがあるもんだ。
だけど……。」

「でも、一人の喧嘩が無いと一日が始まらないし……」

「ああ。……慣れって、怖いな」

しみじみと語る私達の所へ二人仲良しく（？）やつて来るまで、あと
数秒。

朝の風景（後書き）

日常編、またの名をオリキヤラ紹介編です（笑）

女子会ー（前書き）

和葉・香織・優子の華やか(?)なガールズトーク。

女子会ー

「……で、この前の夫婦旅行はどうだった？」

「！？ふ、夫婦って、アタシらはただの……っ！」

優子の言葉に和葉は顔を真っ赤にしながら反論する。ちなみに優子の言う“夫婦旅行”とは、先日平次に届いた依頼に和葉が付いて行つた時の事を指している。

香織は一人の様子を、パンを食べつつ傍観していた。すると……。

「香織～っ！」

和葉が香織に抱きつき、助けを求めてきた。

泣きついてきた和葉の頭を撫で、軽く優子を諫める。

「優子、あんまり和葉をからかわないので

「だつてー、和葉の反応が可愛えからつい

一般より背が低く、中学生にしか見えない香織が一人を宥めている様は何ともアンバランスな感じがするのだが、クラスメイト達にと

つては最早日常の光景になってしまっているため、誰も気にしてはいなかつた。

……ただ一人を除いて。

「……」

香織の背中にチクチクと刺さる視線。

香織は一人に気付かれぬよう溜息を吐くと、心中で毒づく。

（まつたく。女の私にまで妬くとか……あの色黒男め）

しかもその辺の本人は無自覚でやつてのけるのだから性質が悪い。

「和葉……」

「ん？」

「ちょっと、相手考えたほうがいいかも」

「…？」

香織の言葉の裏には「あんな独占欲の強い男、あとで絶対苦労するつて」という思いが隠されているのだが、当然和葉に伝わるはずもなく。

「……」

「じ、冗談！冗談だから、ね？」

「……香織～っ」

「ちよつー。」

己の言葉足らず故の失言を慌てて否定すると、何故かぎゅうぎゅうに抱き締められる香織。

「あーーーウチもっ」

「！？」

いつの間にか一人蚊帳の外状態だつた優子が、我慢出来なくなつたのか、二人を抱え込むようにして輪に加わり、一番下の香織へと一気に体重がかかる。

「～～～っー」

押し退けようにも力の差は歴然としていて。

結果、和葉と優子の気が済むまでこの状態を強いられる事になる香織だった……。

女子会ー（後書き）

トークじゃなくてスキンシップだね、
和葉はスキンシップとか好きそう。
これ

女子のイチャイチャは大好きです。

男子会？（前書き）

一方、平次・孝太郎・他男子生徒達は……。

男子会？

孝太郎及び他男子生徒達は困っていた。
……といつよりも、恐怖を感じていた、の方が正しいだろ？
原因は言わざもがな、西の高校生探偵である服部平次だ。
彼はある一点を凄い形相で睨んでいた。

(服部……その目怖えよー)

平次の視線の先には、和葉に抱きつかれている香織の姿。

早い話が香織への嫉妬だ。

しかも無自覚という傍迷惑なオマケ付きで。

(七瀬スゲーよな。あの視線を受けても平然としこりゅんやで？)

(女にも嫉妬とか、服部マジヤベーよ)

(まだ女やし、睨まれるだけマシや。俺らやつたら確実に半殺し
決定や)

(“半”で済むとええけどな……)

(つか今日はこいつにも増して嫉妬深ないか？)

(確かに。よお考えたら、普段はこんなであんま嫉妬せーへんよ
な)

そんな会話が小声でされているとは全く知らない平次は相変わらず睨みっぱなしで。

孝太郎は意を決して平次に話しかけた。

「……服部」

「あ?」

「お前なー、七瀬睨んどつてもしゃーないやろ」

(おー・小川勇者やつ)

(つか、やっぱアイツ七瀬の事……)

(何を今更)

(……え、マジやつたん!…?)

(これ、俺らの間じや有名な話やべ)

後ろで好き勝手に小声で話すクラスメイト達に(ここから後で来る
……っ!)と一人決意する孝太郎。

もちろんそのような裏事情を知らない平次は、不機嫌そうにそっぽを向いて呟いた。

「別に、睨んでへんわ」

ギロリと鋭い目を孝太郎に向ける。

普通の人間ならば完全に怯んでしまうであろうその視線は、長年つるんできた孝太郎には効果は薄かつた。

孝太郎はさらに言葉を重ねる。

「じゃあ、何で今日はそんなに不機嫌なんや」

「……」

「さつと……」

その瞬間鳴る予鈴のチャイム。

結局服部への尋問は失敗に終わってしまった。

実は部活の時に服部の“普段以上に嫉妬深かった”理由が判明するのだが、この時はまだ、誰も知らない……。

男子会？（後書き）

ガールズトークの対として、男子だし下ネタとか（女子達の）品定め的な会話も考えてたのですが、結局は平次の嫉妬という無難な話に。

しかし女子に嫉妬はさすがにないだろ、と書いてて思いました。

部活動 剣道部（前書き）

平次の嫉妬の理由が判明。

ひいき

道場内に響き渡る悲鳴。

周囲を見渡せばあちこちで倒れどる部員達。

……それに地獄絵図とは云ひの事やな。

人道場の隅で納得すると、一人の後輩が近付いてきた。

「いつも増して荒れますね、先輩」

そう言って後輩
長谷部翔は、普段と変わらない笑みを浮かべて
いた。

「……長谷部、さつきまでアイツと稽古してたよな」

「ええ。でもあんな先輩、まともに相手しつつたら命がこいつあつても足らんので逃げてきました」

……確かに。

今の服部には関わらんほうがええ。
何せこんな惨状をつくつとして、まだやる気やし。

「……で、服部先輩、今日ははどうしたんです？」

「ん？それが俺らにも分からんのや。昼休みも七瀬相手に嫉妬しつたし……」

「七瀬先輩にも？」

「ああ」

「オレ知つとるで。アイツが不機嫌な理由」

「部長！」

突然会話に入ってきたんは剣道部部長。
それより何より、言葉の内容の方が気になつた。

「！何なんです！？」

「まー、とりあえず落ち着けや」

「外で話そう」と出口を指す部長に、俺らは無言で従つた。

* * *

「……で、原因は？」

翌日の教室。

俺は部活で得た情報をクラスメイト達に伝えた。
ちなみに服部と遠山はまだ登校していない。

「昨日は遠山へ告白する相手が、後を絶たんかつたんやで」

そらもう朝の登校時から、先輩後輩関係無し。
……おそれくは昨日、服部が朝練で別々に登校しどつたんせいもあるんやけどな。

「告白するとは勝手やけど、いつの迷惑も考えてほしいわな」

誰かが呟いた言葉に、一同が頷く。

「確かに。……告白した奴らは失恋のショックだけで済むけどな、
その事実を知った服部の怒りを受け止めるんは俺らなんやぞ」

そう愚痴ると肩を叩かれる。

「諦める。それが同じクラスになつた俺らの宿命や」

「早くあの一人ぐつつきやええのに……」と一同の思いが一つにな
つた事はあの一人には内緒や。

部活 i ハ剣道部（後書き）

真相なんてそんなもんです。
だがしかし、部活シーンが思つた以上に少なかつた。

これでこの章は一応終了。

次回からはがつたり平和書くぞー。

お約束？（前書き）

まあ、やつぱりな展開……？

お約束？

「これがここいら辺の地域で祀られる神むんの祠や」

「伝説もあるんだけど、それによるとこの神様、元は人魚で、その人魚の魂を鎮めるために建てられたらしいわ」

「で、その伝説に因んで今は健康長寿の神様って呼ばれるんや」

「……あのーおー一人さん」

「ん？」と同時に振り返る平次と香織。

「どないしたん孝太郎」

「もしかして伝説の話も聞きたいやの？でもこれ結構長いわよ」

「ヤーやなくてつー」

キヨトンとする一人に孝太郎は思わず声を荒げる。
和葉はそんな孝太郎を静めると、困ったように。

「どうして一人とも、そんなに早いん？」

* * *

とある温泉街に改方学園2年一同は修学旅行へ来ていた。

日程は一泊三日。

一泊、二泊は班行動で、三泊はクラス単位での行動となつて
いる。

平次・和葉・香織・孝太郎の四人は同じ班になつたため一緒に移動
しているのだが……。

「やつて、せきとどやる事やつて自由時間にしたいやん」

「そーそー。“不測の事態”も考えて、わ」

「そ、そっだけど……」

「つーか何やねん。その“不測の事態”で」

班行動では学校が指定した場所をいくつか回る事が課題としてある
のだが、平次と香織はその場所をかなりのハイペースで回っている
のだ。

しかも分かりやすい解説付きで。

不思議な事に一人の手にガイドブックは一切見当たらない。

「()は温泉街。そしてこの班には死神……じゃない、探偵さん。
何が起きてもおかしくないからね。一応、課題はやつとかないと怒
られるし」

「ま、まあ確かに……」

香織の言い分に思わず納得してしまった和葉と孝太郎。

一方の平次は憮然とした表情で「オレが事件を呼んでんとちやう。事件がオレを呼んでんのや」と呟いていたのだが、三人はそれを完全に無視。

「それに、面倒な事はせつないと終わらせて、自由時間を多くした方が楽しめるでしょ？」

「……それもそりやね」

「よしそ、じゃあ残りもせつせと回るか」

やる気になつた和葉達とは正反対に、不機嫌そりじみを向く平次。

「ほり行くで、平次！」

「痛つ！？和葉ア！」

「ふーんだ」

「…」

「ひや！？ひやにふんねんへえひ！（ひや！？何すんねん平次！）

「おー。よーく伸びる頬やなー」

いきなり一人だけの世界になつた平次と和葉に、香織達は呆れる。

「……ハイそこー、イチャイチャしてないで早く行くよー」

「イチヤイチヤなんしてへんわ！」

「ハイハイ

「……同時に言つても説得力ないで、ええ加減学習せえよ……」

かくして四人は残りの指定場所を効率よく回つていった。
そして……。

「よつしゃ、じじで終わり……と

「これで後は自由時間やなー！」

安心したその瞬間、辺りに響き渡るパトカーのサイレン。
三人の脳内に“不測の事態”という言葉がリフレインする。

「服部……」

「平次……」

三人が平次を見ると案の定、すっかり探偵モードになつている。

「……よつしゃ、オレらも行くでー！」

「ええ　　つー？」

三人の悲鳴が街中に空しく木靈した……。

お約束？（後書き）

やつぱり事件からは逃れられない（笑）
最初は温泉街ということで湯けむり殺人事件も考えてたんですが、
修学旅行中に血みどろもあれだし、トリックを考えるのが面倒なので
あえなく別路線に。

その代わり糖度は増しかも？

とりあえず入浴シーンは絶対入れたいですね。

束の間の平和（前書き）

そんなこんなで一日終つ。

束の間の平和

「まさかホントに潰れるとは……」

「ホンマやねえ……」

和葉と香織は同時に溜息を吐く。

それもそのはず。

あの後平次が事件に首を突っ込んだため、辛うじて夕食前にはホテルへ戻れたのだが、折角出来た自由時間は全部潰れてしまったのだ。

「でも課題はもう終わらせたし……明日は丸一日使えるから」

「それだけが救いやなあ」

ぶくぶくと口まで温泉に浸かる和葉。
その顔は憂いに満ちている。

「明日はは何もないとええけど……」

「それは……難しいかも」

「犯人もこんな時くらい、大人しくしてしてくれとつたりえの」「元々の

「……やけに実感こもってるね

「まあ、幼馴染やし？似たような事をやめてあるわ」

何と返せばいいのか困つて香織が空を見上げると、夜空は憧れっこに満天の星空で。オマケに今日は満月だ。

（どうりで呟るくなつて思つたら……）

香織が一人物思いに耽つてゐると……。

「…………ま、今ぐだぐだ考へてもしゃーないしつ。そん時はそん時やー！」

「…………立ち直り早っ」

「まあね。思い悩むんはアタシの性分やないしー…といつあえずお風呂出で、平次達と卓球でもやらへん？」

「い、いいけど……」

「よしぃ、決定ー！」

そう言つて勢い良く露天風呂から出る和葉。

女性らしい身体のライン

水滴が流れる白い肌

水気を含んだ艶やかな黒髪と赤みを帯びた頬

それらが月の光に照りされて……。

(わ……)

その姿に思わず香織は息を呑んだ。

「……香織？」

「やっぱ綺麗だなあ、和葉」

「へー?」

突然の香織の言葉に、和葉はさらに顔を真っ赤にする。

「細いのに立派なアーティストだもん。かといって肉感的すぎないし」

「ーーーーーー?」

和葉にはもう何が何やら。

頬はあるが、耳や首筋まで真っ赤だった。

(あつちゅー、言こすぎた?)

香織も風呂から出ると和葉の腕を引く。

「ホント和葉は可愛いなあ」

和葉は俯いて香織のされるがままになつてゐる。

「……早く中に入ろ? 湯冷めしちゃう」

「くつと無言で頷く和葉。

浴衣を着終えた頃、よつやく和葉の頬の赤みも収まつていた。

* * *

「あ、ちゅうど良かつた」

和葉と香織が女湯から出ると、同時に男湯から出る平次と孝太郎に出くわした。

「お、七瀬に遠山やん」

「なあなあ一人とも、卓球やらへんか？」

和葉の誘いに平次は少しだけ嫌な顔をする。

「今からか？風呂入つたばつかやん」

「ええやん、また入れば……やつぱ、黙田～」

「う……う」

上田遣いでお願いされうるたえる平次。
さうして香織の言葉が平次を追い詰める。

「付き合つてくれてもいいんじゃない？今日はアンタの推理に付き
合つたんだから、これぐらー」

天使と悪魔のW攻撃に平次はあえなく撃沈。
残る孝太郎の答えも、もちろんOKだ。

「よしつ、じゃあ遊戯室に行こつか」

そして一行は卓球台のある遊戯室へと向かつた。

* * *

「ビリで間違つたんや！」

「わあねー」

孝太郎と香織は和やかに会話をしながらラリーを続ける。

二人はまさに“温泉卓球”を楽しんでいた。

一方の平次・和葉ペアは……。

「はあつ……」

「は、やるな和葉つ」

「舐めんといつ」

「……あれはもひ温泉でやる卓球のレベルやないで」

「一人とも田^{マジ}が本^{マジ}氣……」

平次達はまさに、試合といつてもおかしくないほどの盛り上がりを見せていた。

二人とも額から汗が噴き出し、浴衣もはだけている。

「あ……」

「どしたん? 七瀬」

「小川君は、和葉見ちゃ駄目」

「え?」

まさかヤキモチか何がかかる?と少しだけ期待する孝太郎。
しかしそんな訳もなく、あっさりとその期待を香織は打ち砕く。

「多分見たら、服部に殺^やられると思つよ」

「へ? ……?」

「今の和葉、中々に色っぽいしー」

和葉本人は気づいて無いが、胸元ははだけ、太腿は見事に露わになつていてる。

おまけに汗をかいているとなれば色気はさらにに増しだ。
これをまともに見たと平次にばれた日には、無自覚の嫉妬に巻き込まれる事は想像に難くない。

「は、はは……」

その考えによつやくいきついた孝太郎は、すぐに視線を一人から逸らす。

「……さて、そろそろ終わりにする?」

香織の言葉で三人が時計を見ると、風呂場を出てから随分時間が経っている。

「まだ決着ついてへんのやけど……」

まだまだ遊び足りないらしい平次。
最初渋っていたのが嘘のようだ。

「でも後1時間で就寝時間だし、その前に汗流したいでしょ?」

「う、うん……」

和葉も渋々といった様子で頷く。

それを合図に一行は遊戯室を出て、温泉へと再び入った。

束の間の平和（後書き）

今回は温泉ならではのシーンを書いてみました。

念願の温泉シーンを書けたので満足です。

絶対和葉ちゃんはスタイルいいと思うの（沖縄編扉絵参照で）。

そして卓球時の浴衣はだけ和葉ちゃん、おそらく平次は一切気付いてません。

卓球に夢中で。

多分寝る直前後悔したかと思われます。

そして隣の孝太郎に結局やつあたり。

サブタイの通り、一日はさりげて大波乱……の予定です。

氣まぜこ~~緊~~囲氣（前書き）

「あの七瀬がキレた……」 b y 孝太郎

気まずい雰囲気

平次達四人は昨日とは正反対の場所を回っていた。
途中、突然和葉がある土産屋の前で止まる。

「これええなあ」

「どうしたの、和葉」

「IJの簪、可愛えと思わへん?」

和葉が指したのは店先に展示された簪だった。
桜をイメージとしたらしいそれは、シンプルながらも色合いが凄く
綺麗で。

「確かに、可愛いね」

「どうしょ……、値段もお手頃やし、買おうかな」

「和葉ー、七瀬ー、置いてくでーー!」

和葉がその簪に手を伸ばそうとしたとき、数メートルから一人を呼ぶ平次の声。

和葉は伸ばした手を引っ込めると、平次達の元へと向かおうとする。

それを慌てて香織が止めた。

「和葉、簪買わなくていいの？」
「それ買つべからず、服部も待ってくれるでしょ」

「うん。でも後でまたここ通るし」

和葉は香織の腕を引き、早足で平次と孝太郎に追いつく。

「何や、欲しいモンでもあつたんか？」

「ん。けどまだ買おうかちよお迷つたから」

「さよか」

そして散策を再開する四人。

この時はまだ何事もなく平和だった。

そう、この時はまだ……。

* * *

「どうして、いつなるの……？」「…

「まあ、まあ……落ち着き？・七瀬」

「これが落ち着いていられるか！」

普段は冷静な香織が、珍しく声を荒げる。

孝太郎はそれを必死に宥めていた。

鳩達も羽根を休める、昼下がりの大きな広場の一角で。

「そうなんですか、豆井戸さん」
まめいど

「ええ」

ベンチに座り、年上の男性とこじやかに会話する和葉。
そして……。

「……」

「ね～、服部くう～ん」

「聞いてるんー？」

数人の女子に囲まれながら和葉を無言で睨む平次。

そんなちょっとした光景しあらばが孝太郎と香織の前に広がっていた。
まだそんな季節ではないのに、この一帯だけ冬が訪れたような錯覚
を覚える。

どうしてこうなったのか。
それは數十年前まで遡る。

* * *

「 ちょっとおオレ、トイレ行ってくるわ」

突然そう言い残し、どこかへ走り去る平次。

「 ちょっと、平次……つーー？」

和葉の制止は平次の耳には届かず、すぐに視界から消えてしまった。
残された三人は小さく溜息を吐く。
すると孝太郎がそれに気付いた。

「 なあ、ここで立つて待つとなるともアレやし、あっここの広場で座つて待たへん？」

指差した先には大きな広場。
確かにそこならベンチもあり通りもよく見えるので、待つのにはピッタリだろう。

「 そやね」

「服部と違つて小川君は気が利くねえ」

「いや、その……あはは」

香織に褒められ、思わず頬を染める孝太郎。

それを笑つて誤魔化しつつ、三人は広場のベンチに座つて待つ事にした。

「あれ？ 君達……」

しばらく経ち、突然誰かに声を掛けられる三人。振り返るとそこには……。

「あ、豆井戸さん」

「君達はあの探偵君のクラスメイトだよね」

三人に話し掛けてきたのは豆井戸達也という男性。彼は昨日起きた事件の容疑者の一人だった。

昨日の事件は、家督相続が原因で起きた殺人事件だった。豆井戸家はこの一帯の名家で、多くの事業を展開している。また別の話では、伝説の人魚の子孫とも言われているらしい。

殺されたのは達也の伯父で、事件の直前に口論となつた達也が真っ先に疑われたのだが、毎度の如く事件に首を突っ込んだ平次が難なく彼の疑いを解き、事件を解決へと導いたのだ。

「…………豆井戸さんはどうしてここに？家とは離れてますよね、ここ

豆井戸家は三人がいる広場と大分距離が離れている。
不思議に思った香織は、疑問を口にした。

「い、いやーちょっとした散歩さ、ハハ……」

途端に動搖する達也に香織は確信する。

(…………和葉に惚れたのか)

先程から和葉をちらりちらりと見ている達也に、香織はやつ結論づけた。

「で、彼はどうしたんだい？」

「あ、平次はさつき『トイレ行ってくる』『三つ巴』か行っちゃって……」

「…………じゃあ皆はここで待ってるのかい？」

「ハイ、 そなんです」

すると達也の顔がぱあっと明るくなる。

「なら……」

その後達也は和葉と会話をしだした。
孝太郎と香織はすっかり蚊帳の外状態。

「……何か、 私達いない事にされてない？」

「せやな……」

「どしたん？」

「女子の声……しかも複数」

遠い田をしながらそんな会話をしている途中、「あれ？」と突然、
耳を澄ませる香織。

ある一点を見つめる香織。

孝太郎もそちらへ田を向けると、そこには……。

「服部ー!？」

こちらへと歩いてくる平次……と、何故か数人の女子。

「何であんな女子がおるん!?!？」

「……大方『班の子と逸れたの一』とか何とか言つてついてきたんでしょ」

香織の予想は当たっていた。

徐々に近付いてくるにつれてはつきりと聞こえてくる会話（と言つても、女子がほぼ一方的に平次に話し掛けているだけなのだが）がそれを裏付ける。

「…………もしかしてやばいんじゃ」

「もう遅いわ……」

「え?……げ、」

孝太郎が再び平次へと視線を向けると、平次の目は和葉を捉えていた。

不機嫌なオーラを撒き散らしながら。

一方の和葉も平次がいると分かっていながら、達也との会話を止めようとしない。

「ついして無言の喧嘩^{ヤキハナ}が始まったのだ。

* * *

「…………もう我慢ならない」

「…………七瀬サン?」

隣から放たれるブラックオーラに、孝太郎は顔が引き攣る。香織は突然しおつと携帯電話を取り出して、ベンチから立つ。

「ちよっと、電話してくれる

「え、えりこ……」

「あの女子達の保護者」

そう言い残し、声が聞こえるかどうかギリギリの場所で電話を掛け始める香織。

「あ、優子?あのね……と連絡とれない?あ……も。……うん。……つてコトで。……。ありがと、よろしくー」

電話が終了したのか、孝太郎の所へと戻つてくれる。

「私は服部を引っ張つてくれるから、小川君は和葉をお願い」

「え、」

今度はすたすたと服部達のいる所へと歩いていく香織を見て、慌てて孝太郎も和葉を呼びに行く。

「服部、行くよ」

香織の言葉に周囲の女子は文句を言い出す。

「ちょっと、ウチら服部君に班の口探してもらおーって頼んじゃるんやけど」

「そーそー。行くならさつちだけで行つてよ」

女子の身勝手な言い分に、香織は優雅に微笑む。
しかしそれは見る者を凍りつかせるような笑みだった。

「班行動は規則。そして服部は私達の班。貴女達に何か言う権利はないと思うけど……そもそも服部は『探す』なんて一言も言ってないじゃない」

「…………」

「でもウチら…………」

「ああ、迷子だっけ？ それならお迎えがもつすべ口口に来るから。それなら文句ないでしょ」

「…………」

「さあ行くよ、服部。小川君達と逸れちやう」

黙ってしまった女子を置いて、平次に香織はそう告げる。

その視線は並んで歩く孝太郎と和葉に向けられている。

平次は無言で一人の元へと歩き出す。

香織はそれを後ろから追いかけた。

ふと香織は和葉の座っていたベンチへと視線を移す。
達也が不満げな表情で座っていた。

＊＊＊

通りを歩く四人。

しかしその雰囲気は何とも微妙だった。

(気まずい……)

孝太郎は心の中で呟いた。

「……あれ？」

すると隣で歩いていた香織が突然呟く。

「どしたん？」

「……あの土産屋」

「あれって……さつき一人が見とつた？」

「うん。……簪が」

香織が見ていたのは、先程一人が立ち止まっていた土産屋だった。
しかし店先には和葉の見ていた簪は無い。

「誰かが買った？」

香織は前方を歩く平次を一瞥する。

「まさか……ね」

お互にを氣にしつつも決して田を呑わせよといしない平次と和葉に、孝太郎と香織は同時に溜息を吐いた。

気まずい雰囲気（後書き）

香織は優子経由で班の人たちに居場所を知らせたのです。
ここで補足するなよ、自分。

そして今回出てきた豆井戸さん。

……私のギャグセンスなんてこんなもん。

今回和葉を追いかけてきた彼ですが、もうちょっと頑張つてしまひ
つもりです。

仲直り？（前書き）

「もひヤダ、あの二人」 b ヨ香織

仲直り？

お風呂あがり、服部と出合つた。

「和葉、話がある」

そう言って服部は和葉の腕を引っ張り、どこかへ連れ去つてしまつ。私はそれを急いで追いかけた。

「……それで……？」

「うん」

私と小川君は今、ホテルのロビーにいる。

視線の先には、ソファに座る服部と和葉の後姿。

「……それと」

後ろを振り返る。

「何で貴方がここにいるんです？豆井戸さん」

そこには何故か豆井戸達也の姿。

「一応このホテル、改方の貸切のはずなんですけど」

「……豆井戸家が経営してるホテルだからね。小さい頃から従業員とは顔馴染みだし」

何だかんだ言いつつ、結局ちやつかり一緒に覗いてるし。

周りを見ると、遠巻きから一人を気にする男女も何人かいる。おそらくは服部か和葉のファンだらう。

しかし当の本人たちは全く気づいてない。
完全に一人の世界だ。

……服部、お前は探偵だらう。

「ちらり」とっては好都合ではあるが、覗かれてるつて気付こいつよ。
しばらくすると、服部が動き出した。

* * *

無言の空気が辛い。

「……和葉」

「……」

「和葉ー。」

「ひょいー。」

肩を引ひき寄せ、無理やり顔を合わせる。

「……お願いやから、無視だけはすんなや」

「平次……」

「……これやる」

オレは匂間買ったソレを和葉の手に乗せる。

和葉は驚いた様子で、それを見とつた。

「IJの簪……」

「ソレ、欲しかったんやろ?」

知らんとでも思うたか?

探偵の觀察眼舐めんなや。

オマエがそれを物欲しそうに見てたんは確認済みや。

「 もしかして……」

「 トマのつこでや、つこで」

ホンマは簪を買つたために抜けたんやけどな。
コイツには絶対に秘密や。

買いに行つたおかげで女子に捕まるし、和葉がオトコと話しこるん
を見る羽田になるし、散々やつたけど。

「 ……おおきに、平次」

……まあ、嬉しそうな和葉が見れたし、結果オーライやな。

和やかになつた雰囲気をしばらくの間楽しむ。
無言はもつ苦痛にはならんかった。

「 ……ふあ」

「 眠いんか？」

「 ん……」

ふと隣の和葉を見ると田がトロンとしつった。
すると肩に和葉の頭が乗つかる。

「……肩じゃ寝こくいやろ」

「うん……？」

寝惚けた様子の和葉を横たえさせる。
太腿にはちょうど和葉の頭。
まあ所謂膝枕つてヤツ?

「少しだけ貸したる」

髪を梳いてやると嬉しそうな表情で笑う。
しばらくそうしてやると、和葉はふにやふにや言いながら二つの間にか眠つてしまつた。

大切そうに髪を握り締めながら。

「ホンマ寝顔はちつさい頃と変わらんない

思わず笑顔がこぼれた。

* * *

「……あの一人はどういう関係なんだい？」

「“幼馴染”です」

「……恋人じゃなく？」

「残念ながら」

唚然とした様子で呟く豆井戸さん。

まあそれもそうだろう。

あの甘い雰囲気を見れば。

「……あんな服部の表情見た事あらへん」

「ちよつと氣味悪いよね」

愛しさの溢れた笑みというべきだらうか。

普段の服部からは想像できない（……というかしたくない）表情だ。

周囲のギャラリーも呆然としてる。

「……まあそういう訳で、和葉の事は諦めてください

傷口が深くなる前に。

幾分か同情を込めて言つてやる。

豆井戸さんは力無く立ち上がり、その場を去つていった。

「大学生って言つてたし、また新しい恋と出会つでしょ」

「哀愁漂つてたな、後姿……」

小川君と一緒に視線で見送る。

彼とはもう、会う事は無いだろう。

「……で、あの二人はいつまでああしてるんだろうか」

「さあな……」

「うして二日目の夜は更けていった。

* * *

おまけ

「ハイ、ストップ！」

平次の前に現れた香織。

「何や七瀬」

「これ以上は男子禁制」

香織達がいるのは女子フロアの階段前。平次は眠る和葉を抱きかかえていた。

「コイツ返しに行くだけやん」

「アンタがフロアにいたらそれだけで大騒ぎになるの」

「せやかでオマジヤ コイツ抱えられんやろ」

「それなら問題なし」

するとともに一人、その場に現れる。

「ハアーハ、服部君」

「……三谷」

「そーいう事で和葉は預かるから」

最終的に和葉は優子に抱えられ、部屋まで帰つたとさ。

仲直り？（後書き）

結局当て馬にすらならなかつた豆井川達也。

ロビーでいちやつかれたらさぞ迷惑だひつなあ。
しかし平然にそんな自覚は一切無し。

夕日だけが見ていた（前書き）

修学旅行編終了！

夕日だけが見ていた

修学旅行最終日。

一、二一日の反動か、三日目は何事もなくあつといつ間に終わった。
そして帰り道、平次と和葉は並んで歩いていた。

「なあ平次」

「ん？」

「修学旅行、楽しかったね」

「……ま、ここの後レポート作成とかも残つとるんやけどな」

「う……。思い出せんといでえな」

二人の間に穏やかな時間が流れる。

夕日が辺りを赤く染めていた。

道も、家も、川も、……一人の顔も。

「和葉」

「なあに？」

平次が突然足を止め、和葉もそれに従う。

「平次？」

平次は何故足を止めたのか、自分でも分からなかつた。
隣にいる幼馴染の名を呼んだ理由も。

「……別に」

「別に、つて何なんよー気になるやん」

困つた平次は、少しだけ目を吊り上げる和葉の頭に手を置き、ぽん
ぽんと軽く叩いた。

すると和葉は顔を真つ赤にして慌てる。

その様子に平次は小さく笑つて。

「……簪、大事にせえよ」

普段とは異なる平次の様子に、和葉の心は高鳴るばかり。

それでも平次の言葉に和葉は「……うん！」と確かに頷いた。

夕田だけが見ていた（後書き）

—「田田の夜から一気に帰路まで話が飛んだ……。

三田田も色々考えたけど話がまとまらず、結局こんな感じに。

それはそうと平次が偽者すぎる（笑）

きっと夕暮れ時の雰囲気に流されたんだと思います。

この後家に帰つて「何やつとんねんオレ！」とか思つんだろうなあ。

赤い痕（前書き）

それは近い将来の話？

赤い痕

白い頃に赤い痕。
私は目を見開いた。

「……和葉」

「ん?」

「ハハ、赤いよ」

痕を指差すと、和葉は「ああ」と言つて苦笑した。

「昨日な、蚊に刺されてしまたん」

「ホラ、ヒヒとかも」と腕を見せられる。
そこにも赤い痕が点々とついていた。

「……まあ、そんな事だろ?と思つたけど」

「?」

「あ、こいつの話」

首を傾げる和葉から奴の横顔へと視線を移す。
奴は大きな欠伸をして、いかにも眠そうですが、つて感じだ。

……まだ付き合っていないし、深読みし過ぎたか。

ふと考へてみる。

近い将来、また似たようなやりとりを交わすのだろうか。
その時和葉は、顔を真っ赤にして慌てるのだろうか。
首まで赤く染めながら詰め寄る和葉と、それをニヤニヤしながら、
けれども愛しきのこもった瞳で見つめるアイツ。

瞼を閉じれば容易に浮かんだ、そんな光景。

思わず苦笑する。

和葉の気持ちはもう知っている。
だからあとはアイツの心次第。

和葉の将来を握る服部は、いつの間にか夢の世界へと旅立っていた。

赤い痕（後書き）

「キスマークと虫刺されは本当に間違えるのか
そんな疑問から生まれたネタ。」

ライバルは彼の親友？（前書き）

名前だけ登場の主人公。

ライバルは彼の親友？

「平次のアホッ！」

和葉の声が廊下に響く。

それは教室にいる私にまで届いた。

数秒後、ガラリと開く扉。

そこにいたのは何やら立腹な様子の和葉だった。

「オハヨ、和葉」

「おはよひみ香織」

「朝からじつしたの？」

席に着いた和葉に話しかける。
すると瞳を吊り上げ……。

「…………藤が『工藤の』『工藤に』『工藤と』。…………朝から工
藤工藤うつせいねんアイツー……。」

「…………あわあ

「工藤」とはおそらく東の高校生探偵「工藤新一」の事だろう。

和葉の反応を見るに、彼の西の高校生探偵が登校中、延々と「工藤」について語り、怒らせたといったところか。

いくら服部とその「工藤」が探偵仲間でもちろん同性とはいえ、その相手の事ばかり話されでは、服部に想いを寄せる和葉は当然面白くないだろう。

……ま、早い話が「工藤」へのヤキモチってヤツ?

しかもそれがほぼ毎日だというのだから、服部の「工藤」への「執心ぶりにちょっとばかし怖いものを感じる。

「和葉も、その『工藤』つてヤツも、大変だねえ」

さすがの東の名探偵クンも、まさかここまで懐かれてるとは知らないだろ?。

思わず心中で合掌する。

「和葉ア！」

教室にやつてきた噂の服部。

そして二人は再び言い争いを始める。

「……服部の愛情は重いんだろうなあ」

「上藤」への嫌きつぶりといい。

和葉への（無自覚の）独占欲といい。

思わず漏れた私の呟きは教室の喧騒でかき消された。

ライバルは彼の親友？（後書き）

朝から「工藤」連呼はきついだろうな、和葉……。

実際はそうじやないのかかもしれません、平次は工藤工藤言い過ぎなイメージが頭から離れない。

それは禁句です（前書き）

最近書く服部が、段々情けない奴になっているような……。

それは禁句です

部活帰りにファストフード店へと寄つた平次達五人。翔はハンバーガーを三つ平らげていた。

「よお食べるなー長谷部」

孝太郎の細身の体型とは裏腹な翔の食べっぷりに驚きを隠せない。すると翔はいつもの笑みを崩さず、女子一人に爆弾を落とした。

「体重が50kgあつちゃつたんで、増やそつと思って」

翔のその発言に、和葉と優子の二人は衝撃で言葉を失くす。しかしそれに全く気付かない平次。それが不幸の始まりだった……。

「ひょろいなー、自分」

「ええ。食べても食べても減るんです」

「……ちゅつ」

一人を孝太郎は止めようとするも、会話は止まるどころか盛り上がり

つていいく。

そしてとうとう平次は地雷を踏んでしまった。

「そや、体重といえば和葉。オマエこないだ教室で『太った』言つてへんかったか?」

「服部!」

「先輩!？」

面白がっていた翔も、その言葉には流石に焦りを示す。

孝太郎に至つては頭を抱えて「俺は知らんぞ……」と傍観を決め込んだ。

「……平次」

「な、何や……」

平次もようやく不穏な空氣を感じ取ったのか、その顔は引き攣つていた。

和葉は静かに立ち上がり小さく息を吐き出すと、俯いていた顔をキツとあげ……。

「このんの……鈍感無神経男ッ!」

バチンッと乾いた音が響く。

平次の色黒の頬には見事な紅葉ができていた。

それは禁句です（後書き）

これは半分実話です（翔の発言とか）。
ある友人（@男）との会話がキッカケで書きました。

翔はともかく平次は素での発言。

平次は無神経な言葉で和葉を怒らせてそういうです。
新一の「ブラジャー（ロス行きの飛行機のやつね）」発言みたいな
事はやらかさないでほしいな……。

二人の関係（前書き）

かつこいい平次を目指しました。

一人の関係

「平次なん、推理ドアホのクセにつ！」

「何やとーもつべん言つてみ和葉！」

「はつ、何度でも言つたるわ。平次の色黒推理オタク！」

「色黒は関係ないやろー！」

まーたやつてるよ、あの二人。
本当毎日飽きないんだから……。

そういうえばと、ふと頭に浮かんだ過去の一場面。
……あれは確か高校一年の春だったはず。

痴話喧嘩を横目に、私はその日の事を思い出していった……。

高等部へと進学し、外部生も入学して賑やかになつた改方学園。
しかしそれはいい事ばかりでもなかつた。

* * *

中等部からの生徒は、服部と和葉の関係を少なからず知つてゐる。
だから表立つて二人（特に和葉）にちょっかいをかけてくる輩はあまりいなかつた（全くいな……というわけでもないが）。
しかし外部生は一人の微妙な関係など知らないから、何やかんやと突つかかってくるのだ。

その上服部は高校生探偵として活躍し始めて、ファンつてヤツも現れてきた。

服部の隣にいる和葉は、やはりファンにとっては面白くないのだろう。

和葉への小さな嫌がらせや呼び出しが時たまあった。

そんなある日の事。

「アンタが遠山和葉？」

和葉と歩いていたら突然話し掛けられる。

声のする方へ顔を向けると、数人の女子が立っていた。

「ちよお、ええ？」

「う、うん……」

「ちょお行つてくれるね」と私に言い残し、女子達とどこかへ行ってしまう。

和葉が心配で、私はそれを尾行した。

万一何かがあつた時、和葉を助けるために。

和葉が連れていかれたのは定番の校舎裏。

女子達は立ち止ると、これまたお決まりの台詞を口にする。

「服部君とはどういう関係なん?」

……やつぱりな。

「平次は……幼馴染や」

「じゃあ何で服部君に纏わりつくんよ。恋人やの? 幼馴染なんに、服部君やて迷惑してるやろ」

いやいや、むしろ貴女方が迷惑ですって。

何でこの手の輩は明確な関係性を求めるんだろつか（まあ、単に難癖つけてるだけなんだけど）。

和葉は文句を言つ女子達に、凛とした態度で言い返した。

「別に、幼馴染は関係あらへんや。平次は迷惑な時ははつきり『迷惑や』言つし。……大体、一緒にある事に理由なんかいるん?」

「…………」

リーダー格らしき女子の目が鋭くなる。

一触即発の雰囲気。

しかし、それは意外な人物によつて破られた。

「何やつとるん?」

「和葉!」

「平次!?」

突如現れた服部と優子の二人。

優子は和葉の手をとり、その場から離れるよう促す。

「行こつ、和葉」

「ゆ、優子つ」

「まだ話は終わってへんで!」

「……こつからはオレが話聞いたるで

和葉を背に隠すような形で対峙する服部。

二人が離れた事を確認すると、女子達へと鋭い視線を向ける。

するとリーダー格の女子が、場の空気に耐え切れなくなつたのか口を開いた。

「……何で!一人は一緒に居るんです? 恋人やないんでしょ!?」

「……オレな、その恋人やからとか何やからとかがよお分からんのや」

「え？」

「一緒に居るんに何やそーいうんがいるんか?別にいらんやね?…
…それにな、少なくともオマエらにオレの交友関係へ口出しされる
筋合いなんあらへん。迷惑なだけや」

その声色に僅かながらの怒氣を感じ、押し黙る女子達。
そして服部はとどめを刺した。

「今度和葉に変なイチャモンつけて手エ出してみ?オンナやからつ
て容赦せーへんぞ」

そう言つて服部はその場を去つた。

* * *

「何やの、まつたくー!」

文句を言いながら席へと座る和葉。
そんな和葉の様子に苦笑する。

……和葉知つてる?アンタはこつだつて、服部に守られているんだ

よ。

数え切れないほどに喧嘩しても、心の奥では深く強く、繋がっている二人。

服部の、和葉へ向かう多くの思いの中に、和葉の望むような恋心があるかはまだ分からぬけど。

それでも、和葉を大切に思つてゐるのは確かだから。

「大丈夫だよ、和葉」

「…」「うん……？」

私の言葉に、和葉は首を傾げた。

一人の関係（後書き）

幼馴染だつたり友人だつたり姉弟だつたり兄妹だつたり保護者の存在だつたり……。

平和の関係つて新蘭以上に色々内包していく、一言じや言い表せないイメージ。

話の展開が少女漫画チックかな？

前一作の服部があまりにアレだつたので、名誉挽回に。

恋愛感情の有無は置いといて、平次は和葉を一番大事に思つてるんじゃないかと（その割に扱いは……つて感じですけど）。

それが平次のあの発言に繋がつてます。

三大欲求（前書き）

平次も一応健全な男子高校生です。

三大欲求

「アタシ、平次の三大欲求は“食欲・睡眠欲・推理欲”やと思つんよ」

「……うーん」

和葉の突然の言葉に思わず私は頷きそつになるが、何よりもまずは疑問を口にする。

「どうしたの突然」

「あのな、昨日ふと思て。で、平次に言つてみたんよ」

「ほ、本人に……」

「うん。そしたら溜息吐かれて。何でやる」

「それは……まあ」

幼馴染で近すぎる関係故なのか、性差故なのか、はたまたその性格故なのか、（いくら推理オタクとはいえ）健全な男子高校生の性欲を否定されるとは。

私も女である以上想像の範囲を抜け出せないが、服部平次、なかなかに複雑な心境だつただろう。

「……和葉」

「ん？」

「オトコハニ異性をあまり信用するもんじゃないよ」

「？」

男子高校生を理解しきれてない和葉の無防備さに少しばかり危うさを感じて、一応の忠告をするも、あまり伝わらなかつたようだ。

……ま、それでも特に心配は要らないだらつ。
和葉にはとっても怖い番犬が付いているし。

探偵なんぞをやってこむドーベルマンが……ね？

三大欲求（後書き）

和葉のその手の疎さは私の友人を少し参考にしています。

実際のところ、男子高校生の脳内はどうなってるんでしょうか？
女の私には永遠の謎ですな。

嵐の転校生（前書き）

転校生に嵐の予感。

嵐の転校生

「皆、今日転校生が来るんやでー！」

生徒の一人が興奮気味に教室へ駆け込んでそう叫ぶと、クラスメイト達はわっと盛り上がった。
それは和葉も例外ではない。

「どんな子おやろね？」

「ああね……」

和葉は目を輝かせながら香織に話しかけるも、香織の反応はあまりに素っ気無いものだつた。
どうやら転校生への興味は一切無いらしい。
それどころか、何故か苦虫を噛み潰したような表情になつてゐる。

「香織？」

「HR始めるから早座れー！」

和葉の声は担任の着席を促す言葉でかき消された。

* * *

「西園寺真莉亞です」

担任に促され入ってきた転校生の少女に、生徒達（特に男子）から歓声があがる。

それもそのはず。

整った容貌と色素の薄いウェーブがかつた髪の真莉亞は、まるで西洋人形のような愛らしさだったからだ。

「へえー、結構可愛えやん。なあ、服部」

「ほーか？」

「反応うつすいいな。……ま、普段あんだけ美人を見とればな」

「和葉は美人ちゃうぞ？」

「……俺、“遠山”なんて一言も言つてへんけどな」

孝太郎は言葉とは裏腹に、さほど転校生に興味は無いようだ。
平次に至っては一瞥したのみ。

どうやら一人にとって、真莉亞は心奪われる存在では無いらしい。

「ん？」

「でも……」

「どうかで見た事ある氣イガ……」

「うーん……“西園寺”家やし、事件の依頼かなんかで会つたんと
ちやう？」

西園寺家は鈴木家に次ぐ財閥だ。

特に西日本中心にその名は知れ渡つていて、平次も何度も何度か依頼を受けた事がある。

「かもな……」

孝太郎の言葉に納得したのか、平次はそれ以上追求はしなかつた。

* * *

HR終了後、一部の人達を除き、真莉亜の席の周りに生徒達が集まる。

クラスメイトの質問に真莉亜はにこやかに答えていく。
するとある一人がこんな質問を投げかけた。

「真莉亜ちゃんは何で改方に来たん?」

それがある意味嵐の始まりだったのかもしれない。

「実は……服部平次様に逢う為なんです！」

「……？」

「…………ん？」

真莉亜の言葉にクラスは騒然。

一方の名前を呼ばれた少数派の人間の平次は、呑気に真莉亜の方を向く。

真莉亜はおもむろに立ち上がり平次の席へと歩き、そして満面の笑みで……抱きついた。

「なっ……？」

「あの日からずっとお逢いしたかったんです、平次様っ！」

「ちょひ、離せえ！」

真莉亜の突然の行動に、クラスメイトは一斉に和葉へと視線を移す。和葉は香織に目隠しをされ、どうやら抱きつく瞬間は見ていなかつたようだ。

和葉の気持ちを知るクラスメイトは修羅場を想像していたのだが、香織の咄嗟の機転で最悪の事態が回避された事に安堵する。いきなり視界を隠された和葉は、香織の手を避けよつとする。

「香織ー見えへんよお？」

「……香織？」

和葉の言葉に真莉亞の動きが止まる。

真莉亞は平次から離れ、やつくりと和葉と香織のいる方向へと田を向けた。

「…貴女、まさか……」

「……ちつ

香織を視界にいれた瞬間、真莉亞の目が見開く。

一方の香織は舌打ちをし、普段からは想像もできないような黒いオーラを放っていた。

回避できたかと思われた修羅場が別の形で実現しかけている事に、クラスメイトは戦々恐々としながら、しかし興味深そうに見守っている。

「へ？ へ？？」

二人の最も近くにいながら最も状況を把握しきれていない和葉は、ただただ頭上に疑問符を浮かべていた。

眞の転校生（後書き）

お前はあつても全然出でこなかつた眞莉亞さん、ようやく登場です。
香織と眞莉亞の因縁？は次回にて。

……展開が少し早すぎただでしょ？つか？

因縁の一人（前書き）

香織と真莉亞、その因縁とは……？

因縁の一人

和葉が疑問符を浮かべている間も、香織と真莉亜は無言で対峙している。

先に無言を破つたのは真莉亜だった。

「ふふふふ……。『！」」
ふだ念つたが百年田』ですわ、香織……っ！」

「人違ひじやないでしょつか。私は貴女を全く知りませんし？」

「くつ、その反応……っ。変わつてませんわねー！」

「人の話聞いてます？知らないつて言つてているのに。ホント学習能力の無い人つて嫌」

「な……っーー！」

香織のいつそ穏やかともいえる表情とは裏腹な言葉と背後の黒いオーラのギャップに、クラスメイト達はこのツツ「」所満載な光景を見ているにもかかわらず、何も言えない。
この変な緊張感の漂う場を崩したのは……。

「香織、真莉亜ちゃんと知り合いなん？」

ようやく状況を（かなりずれた形で）理解した和葉。

どうやら和葉に香織のオーラは全く効果がないようで、純粹に疑問のこもつた大きな瞳で香織を見つめている。

その瞳に毒氣を抜かれたのか、香織から放たれていた黒いオーラが霧散していった。

(遠山(和葉)ナイス……!)

クラスメイト達に内心「勇者や!」と和葉は称えられていたのだが、それを当の本人が知る事は一生無いだろう。……。

ともかく教室に訪れた(一応の)平穏に、安堵の空気が広がった。

「……和葉、あれの事は気にしなくていいから

「あれって何よっ!……ってか、ちょっととは気にしなさー!……

未だに噛み付いてくる真莉亜を、香織は冷たい目で見る。

「忘れもしませんわあの口々を……つー何においても私よりも上で!その拳句に勝ち逃げなんて!…」

……真莉亜の言葉から推測するに。

どうやら香織は真莉亜のかつてのクラスメイトらしい。

そして勉強でもその他の事でも、常に香織が真莉亜に勝ち(……まあ、真莉亜が一方的に挑んでいたのだろうが)。

その挙句、香織は転校したので真莉亜の目には「香織が勝ち逃げした」ように見えたのだろう。

クラスメイト達はようやく背景を理解し、一人の温度差のある争いを生暖かく見守るだけの余裕が出来た。

因縁の一人（後書き）

「」まで和葉ちゃんは天然じゃないだろうと自分でシッ ハミ（オイ オイ……）。

多分次でこの編は終わりになります。

宣戦布告（前書き）

真莉亞の次なる標的は……。
ライバル

宣戦布告

朝の一件が落ち着いた頃、和葉は背後にコチラを探るような、謎の視線を感じていた。

(な、何やろ……)

恐怖は全く感じない。
ただ酷く落ち着かないのだ。

「うーん」と和葉が唸つていると、香織が心配そうに話し掛けた。

「どうしたの、和葉」

「んー、ちょっとね……」

「何かあつたんか和葉」

「平次」

香織と話していると、平次もその中に参加して来た。
和葉は戸惑う。

何故か一人がやつて來た途端、視線が鋭くなつたのだ。

(ホンマ、何なん……！？)

「和葉？」

「ホ、ホンマ何でもないんよつ……アハハ」

* * *

視線の主は分からぬまま、放課後になつた。

「……遠山和葉サン？」

「ん？ どないしたん、真莉亜ちゃん」

突然和葉は真莉亜に呼ばれた。

クラスメイト達は（修羅場来たか！？）と不安交じりの期待を寄せ
る。

香織は和葉を庇うように、一人の前へと出た。

「和葉に何か用？」

「……」

香織が現れると真莉亞は俯き、何事かぶつぶつと呟く。
そして……。

「……遠山和葉！」

「は、ハイ！」

真莉亞は顔をあげたかと思うと和葉をキッと睨み、

「貴女には……貴女にだけは…香織と平次様は渡しませんわ……」

「……へ？」

「は？」

そう宣言すると、「覚えていらっしゃい」と悪党が言いがちな台詞を残して帰ってしまった。

残された一同はぽかんとする。

(服部は分かるけど……何で七瀬!?)

内心で全員、そりそり口む。
そして当人達は……。

「ど、どひこひ……？」

「和葉、今のは全部忘れよ。ね？」

「え、え？」

状況を理解しきれていない和葉に、香織は必死にそつ言こと聞かせる。
それはもう必死に。

「……西園寺は七瀬を気に入つてた、つちゅ一事か？」

ぼそりと孝太郎が呟く。

「そもそも七瀬が気に入ってるんが遠山で、ついでに言え
ば服部も遠山を気に掛けとつて……」

「要は、遠山への嫉妬？」

「香織と服部君が和葉に構つてるから……」

ぼそぼそとクラスメイト達の間で意見がまとまつてこぐ。
そして一回の出した結論は……。

「西園寺真莉亜と遠山和葉は（一方的な？）恋と友情のライバル」

今後の展開にクラスメイト達は期待が膨らみ、香織は頭を抱えた。
キーパーソンの平次と和葉は何も知らないまま……。

宣戦布告（後書き）

嵐といつほどのものではなかつたかな。
ただ真莉亜が和葉をライバル視する理由が書きたかつただけです。

平和の長い一日（前書き）

長い一日の始まり。

平和の長い一日

ある日の日曜日。

公園の時計を眺めながら、和葉は人を待っていた。
頬を赤らめながら時々周りを見渡す様子に、周囲の人々は「ああ、
デートか何かの待ち合わせか」と思うであろう。

まあ、実際は幼馴染である平次と映画を見に行くだけなのだが。

「遅いなあ、平次……」

彼の幼馴染は事件を理由にドタキャンをする事が多々あり、今回も
そうなるのではと、和葉の心に不安が広がる。
そんな時、和葉を呼ぶ声が耳に届いた。

「和葉ア！」

「平次つ」

息を切らせ駆けて来る平次に、和葉はこつそりと安堵する。
平次は眉尻を下げ、遅れた事を詫びた。

「スマン、寝坊した……」

「ええよ。まだ映画まで大分時間あるし」

「そか。……ほな、行くか」

「うん」

そんな会話を交わしながら、一人は歩き出した。
それを影から見ている人達がいるとも知らずに……。

* * *

「ふふふ……。一時はどうなるかと思つたけど、やつと一人が動いたわ」

「三谷……」

「三谷先輩……」

草陰で怪しげに笑う優子と、それを呆れた様子で見る孝太郎と翔。傍から見ればただの不審者だ。

やる氣満々な優子とは対照的に孝太郎と翔はかなり渋々といった様子。

どうやら男一人は無理やり連れてこられたようだ。

「……大体、どうして七瀬先輩が居らんのです？」

優子の暴走を止める事ができてなおかつ師として仰ぐ香織の不在に、かなり不満げな様子の翔。

孝太郎も「そうだ」と言わんばかりに頷いている。

「最初は香織も誘おうとは思つたんやけどね、どうせ『止めときなさい』て言われるだけやし……」

その光景が容易に浮かび、思わず苦笑する一人。

「せやから暇そおなあんたらをね……」

「いづらの都合はお構いなしですか」

「ん? どおせ予定なん、ないやろ?」

「……」

団星だったのか翔は目を逸らし、一方の優子は小生意気な後輩を言いくるめられた事に上機嫌だ。

そんな一人を尻目に、孝太郎は小さくなつていく平次と和葉の後姿を見ながら「なあ」と話し掛けた。

「アイツら追いかけんでええんか?」

「ーー、急いで追いかけんとつ

二人は目を凝らさなければ見えないほど先を歩いている。
優子達は急いで、しかし見つからぬよう慎重に尾行を始めた。

平和の長い一日（後書き）

前回があまりに平和要素皆無だったので……。

今回はドタバタコメディかな（ラブは？）

デート？中の男女を尾行する三人組、傍から見れば完全に不審者です。

桃色電車（前書き）

電車内にて。

桃色電車

歩きの二人は現在電車に乗っているのだが、一人のいる車両は休日のためか空いていた。

「やっぱ映画は昼飯の後か?」

「せやね……」

その気質ゆえか、平次は手すりに掴まり、端の席に座る和葉の正面に立っていた。

時折軽いじやれ合いをしながら会話を交わしている。

そんな一人の周りだけ、どことなく甘い空氣で、侵しがたい雰囲気に包まれていた。

* * *

「……あれで“幼馴染”つちゅーんが信じられんよなあ

「あの空氣は恋人ですよね……」

隣の車両から平次と和葉を観察していた孝太郎と翔は、田の前の光景に呆れ交じりの呟きをもらした。

ぱしぶしと座席を叩き一人身悶えている不審者を意識から外しながら

「何で俺、ここにんなんしてるんでしようか……」

「俺も知りたいわ」

二人は出来るだけ優子と距離をとりつつ、観察を続けた。

* * *

「平次？」

「ん？」

「どないしたん？さつきからボーッとして」

少しだけ心配そうに平次を見る和葉。

平次は苦笑し、和葉の頭を軽く2・3回叩いた。

「心配すんなや。別に何でもないで」

「やうやく」

「せやせや。それより昼何食うか考えとけ」

「うん」

楽しそうに笑う和葉に、平次は小さく安堵の溜息を吐く。
そして「平次は何食べたい?」という和葉の問い合わせに「せやなー
……」と返しながら、別の事に頭を働かせていた。

やがて電車は目的の駅へと到着し、平次と和葉は電車から降りる。

「へえ……初めて来たけど綺麗やねえ」

和葉は改札を出た後、周りを見渡しながら小さく感想をもらした。
平次と和葉は昼食をとるべく街中を散策していると……。

「……あれ?」

「どないしたん?」

和葉の目が見覚えのある後姿を捉えた。

「あれって……」

桃色電車（後書き）

いちや いちや……してませんよね、やっぱり。
そろそろ尾行組の一人が危ない人になつてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8595w/>

大阪は今日も平和です。

2011年11月23日16時47分発行